季刊 鐵の世界 2023 New Year 203

【桂スチール】

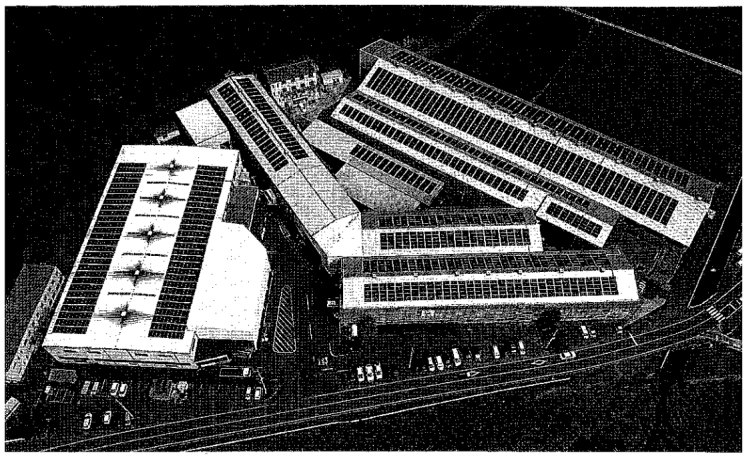
桂スチール（兵庫県姫路市、三木伸一社長）も中長期的には、鉄骨需要が頭打ちとなるとの予想を基に、企業体質のさらなる強化を目指していく。目標は「BH製作量が現在の月間6000―7000㌧から月間4000㌧となっても、確実に利益が出せる企業基盤を整備していく」（三木社長）と明快で、そのための省力化・自動化の設備投資を進めていく。

同社はBH（ビルトH形鋼）の国内トップの製作業者。現在、岡山第1工場、岡山第2工場、岡山第3工場、岡山第5工場、友延工場、玉野工場・玉野第2工場、姫路工場を有し、BH製作、鉄骨向けの切板、梁加工などを行っている。前期（2022年9月期）は国内建築では好調だった大型・超大型案件の追い風を受け、BH製作量は年間7万4884㌧と21年9月期比38・9％増と4割近い増加となり、切板（BH向けと鉄骨向けのトータル）5を含む）は7万6888㌧と同37・9％増となった。結果、業績も売上高で160億円強、経常利益も社員への臨時賞与なども実施したうえで、大幅な増益となった。「三木桂吾・前社長（名誉会長）がHグレードなどのファブリケーターと寄り添う経営を行ってくれた。一方で、工場の生産効率の向上を進めてくれた。こうした前社長の経営努力が業績に反映された」と喜ぶ。

ただ、今期（23年9月期）は目標をあまり上げず、慎重な姿勢で臨む。BH製作量については前期並みの水準（年間7万7000㌧程度）とした。結果、業績も売上高で170億円強と前期比10億円程度増、経常利益は黒字継続とした。着実に利益を上げながら、企業基盤の強化を進めていき、次の〝冬の時代〟に備える。

基盤強化の軸は工場の省力化であり、その先には無人化稼働も視野に入れている。こうした目標に向けて、設備投資は途切れなく実施している。切板関連設備ではプラズマ切断機は昨年（22年）の春に、友延工場の2基のうちの1基を更新した。マーキングもできる設備で、BH製作の前処理加工の効率化に寄与させている。今後はレーザ切断機の増設も進めていく方針だ。

BH製作と付帯設備とその1次加工設備の増強にも注力している。22年7月には岡山第1工場のD棟に4・8㌧天井クレーンを設置、同8月には第1工場にBH用の組立矯正機1基、平板横型開先機1基を導入するとともに、友延工場は屋内に20㌧片脚橋型クレーン1基、屋外に2・8㌧のテント用のクレーンを設置した。矯正機と平板横型開先機はBH製作の前処理と最終工程の生産体制の強化が目的。同9月には第3工場（備前市吉永町）にはH形鋼用ドリルマシン1基（大東精機製）とH形鋼用開先加工機1基を導入し、さらに同秋にはフランジ部分の専用自動加工設備（ロボット）を新設した。フランジの特殊な加工はこれまで、熟練作業者が行ってきたが、最新鋭設備を導入したことで、作業の平準化につなげ、全体の生産性の向上に貢献させていく。


桂スチール岡山第一工場

さらに、今年（23年）は今年2月末に、岡山第2工場のS2棟のBHの穴明け設備を最新鋭機に更新する。更新設備は大同マシナリー製で、2500×1000㎜までの大型H形鋼の加工ができる。この更新もBHの1次加工の自動化を促進し、さらに省力化・効率化させるのが狙いだ。そして、こうした自動化・高機能設備への更新・増強を進めることで、世界レベルでも生産性の高い工場を整備していく。

また、高騰するエネルギー対策にも力を入れていく。22年夏には岡山第1工場と岡山第2工場の屋根に太陽光発電設備を設置した。投資金額は4億5千万円。完成後の両工場の発電出力は4メガワットで、自社の工場用に使用している。この投資により、全社の発電出力は42メガワットとなった。電力代が高騰し、工場で使用する電力コスト負担が増しており、この負担を軽減するとともに、SDGs経営の一環。今後も太陽光発電の設置や省エネ関係の投資を行い、エネルギー面でも強い企業を目指す。（天）